

〈書評〉

中村義著

『白岩龍平日記』

アジア主義実業家の生涯』

藤井昇三

本書は白岩龍平（一八七〇（明治三）～一九四二（昭和一七））の現存する日記を中心として、その生涯を描いた伝記を書き加えて、実業家としての白岩の人間像を構築することを目指した労作である。

著者は中国近代史を専門分野としており、特に辛亥革命史研究の第一人者として広く学界に知られている。著者の十有余年に亘る白岩研究の過程で、資料文献の探索渉猟は近現代の日中関係史から中国史、日本史の各分野に及び、著書の豊かな学殖が至るところに見い出され、本書は単に白岩の個人的な日記の紹介にとどまらず同時代の日中関係の政治、外交、経済、文化、思想などの諸側面をも明らかにすることに成功している。

本書の構成を目次によって示せば次の通りである。

プロローグ

第一部 アジア主義実業家の生涯

一 美作大字宮本

二 荒尾精との邂逅

三 日清貿易研究所

四 荒尾を継ぐもの

五 同郷の先達——西穀一・岸田吟香

六 三角航路——大東汽船会社

七 上海生活——新婚

八 湖南へ

九 湖南汽船から日清汽船

一〇 近衛篤磨

一一 変法派とともに

一二 亜東時報

一三 回想の唐才常

一四 武昌拳兵前後

一五 中国論

一六 揚子江組

一七 日華学会と日華クラブ

一八 東亜同文会

一九 東亜興業

二〇 日華実業協会

二一 対支問題に慎重なれ——済南事件

二二 西園寺公望と近衛文磨

二三 昭和期政治の渦中で

二四 晩年

第二部 白岩龍平日記

明治二九年～明治三九年

昭和八年（昭和一〇年）

エピソード

索引（主要人名索引・主要事項索引）

## 内容の概要

**プロローグ** 著者は「湖南の風氣開発は日本人の義務なり」という白岩の言葉を引用して、湖南を中心に活動した白岩の原点が湖南の風土、湖南人の気質への白岩の傾倒であったと指摘している。白岩の資本主義的实践が「湖南を国際政治経済文化のシステムに引きずり込むことになり、他方で「湖南の風氣開発」は湖南の「社会経済に厳しいインパクトをあたえた」（三頁）換言すれば「湖南省民からみれば白岩によって日本資本主義の市場として、帝国主义諸国の角逐の場としての苦難・過酷な運命にひきずりこまれ」（中村義『辛亥革命史研究』未来社、一九七九年、一九頁）ることになったのである。

## 第一部

一から四までは、白岩の生い立ちから実業家としての出発点までを素描している。

岡山県の神官の三男に生まれた白岩は、一四歳のとき儒学者岸南岳の漢学塾でその才能を見いだされて、青雲の志を胸に東京に遊学したが学資に窮し、書籍配達肉體労働に明け暮れるうち、陸軍軍籍を離れて日清貿易研究所を設立した荒尾精の門下に入り、生涯の師として荒尾に私淑することになる。研究所を退学処分となった（但し卒業生として卒業名簿に記載されている）のち、荒尾の急死を

機に、白岩は日記をつけ始めた。

五は岳父の西穀一と「荒尾の師」岸田吟香の白岩との親密な関係を叙述している。

六は白岩の最初の実業活動である大東新利洋行（のちの大東汽船合資会社）における中国の江南内河航運事業の開始についての記述である。

七は結婚後の白岩龍平・艶子夫妻の上海での生活と、その中で白岩と中国の改革派との交流について述べている。

八は白岩が（中国服でなく洋装の）日本人として最初の湖南訪問を実現したときの極めて危険な状況を臨場感をもって描写している。

九は白岩が一九〇〇年頃から湖南汽船設立計画を進めたが難航を重ねた末、一九〇二年に漸く実現。さらに在中国航運関係四社の統合による一九〇七年の日清汽船の設立となり、白岩は専務取締役として創業期の経営に専念する。この日清汽船で築き上げた人脈は政・官・財の各方面に亘っており、中国通実業家としての信頼を獲得し、対中国政策の重要問題にかかわることになる。

一〇は白岩と近衛篤磨の交流と人間関係を取り上げる。近衛は白岩を非常に信頼し、白岩の良き理解者として常に白岩を助けた。一方、白岩も近衛に頼るところが大きかった。

一一戊戌変法から義和団事件前後にかけての数年間は、列強の勢力範囲拡大競争が熾烈となり正に帝国主義の利権獲得競争が展開された。こうした状況の下で中国では戊戌政変、義和団事件、自立軍起義、惠州起義などの変革と動乱の嵐が吹き荒れたのである。

この時期の白岩は上海の基盤をさらに湖南へと拡大しようとして懸命であり、大東汽船の経営から、さらに湖南汽船の設立を目指して多忙を極めた。同時に白岩は東亜同文会の幹部として、中国の变法派との親交を深め、变法派の政治活動を支援している。

一二は一八九八年白岩らが発起人となり上海で創刊した『亜東時報』の社内で特に盛名の高かった山根虎之助（立庵）の背後に白岩がパトロンとして存在した。山根は变法派を支援し、变法派と共に闘う姿勢を示す文章を書いたことにも触れている。

一三は变法派の唐才常が戊戌政変以後、長江流域の漢口での自立軍起義を目指して準備を進める中で、白岩が自立軍起義計画に深く関与し、東京・上海・漢口と東奔西走して唐に協力し援助する過程を、白岩日記を中心に『小川平吉関係文書』、『近衛篤磨日記』、『続対支回顧録』など多くの資料を駆使して詳述している。

一四武昌起義前後の白岩は立憲派、立憲君主制への期待が強く、孫文ら革命派は「微力憂ふるに足らず」として殆んど革命成功を予想していなかった。武昌起義後は、中国内部の内在的研究により深部の動向に目を向けることを強調するようになる。それは、上海に拠点を置きながらも、東京から、日本の国益からの視点が軸となってきたという意味で、白岩の中国認識の転機であったと著者は見ている。

一五白岩の新しい中華民国に対する認識と期待は、革命派が現状では袁世凱に妥協しているが、これは現状に満足しているからではなく、潜勢力を養い十分な準備を整えて革命事業を完成しようとしているからだを見る。そして、革命の洗礼を受けた青年たちが責

任を自覚して奮闘するところに、将来の中国の復活の光明は期待できるものであり、中国の前途は決して悲観するには及ばないと論じている。また日本の対中国政策に触れて、満州は日本の勢力範囲に置く必要があるかも知れないが、内蒙古への進出には強く反対であり、一方、中国人の間に黄色人種協力の声が出始めていることは大いに歓迎すると述べている。

一六大正期に入って「満蒙」重視が日本の国策となった時期に、白岩は長江流域を重視する立場から『揚子江流域——列国競争の焦点地』を出版した。長江方面で活動する実業家・商人のためのガイドブックである。ここには白岩自身の長年の経験を投影したと見られる長江流域の実情が克明に紹介されている。

また「当代きっての中国向け実業家」白岩の存在は、原敬首相の注目するところとなった。

一七白岩は日中関係に関連のある数多くの団体の設立に参画しているが、一九一八年創立の日華学会に理事として参加し、中国青年の日本留学に尽力している。また「幻のクラブ」に終わった日華クラブの準備（一九一八年）に当たっている。白岩はさらに、一九一七年中国問題を研究・討議する目的で宮島大八が組織した一水会にも参加し熱心に出席している。

一八一九一八年、既存の東亜会と同文会が合同して発足した東亜同文会は、中国の保全、中国改善の助成、中国時事の討究と実行、国論の喚起などの目的を掲げたアジア主義的半官半民の団体であった。白岩は会の発足以来、会長近衛篤磨の厚い信頼の下、会の運営と発展に極めて大きな貢献をした。一九二三年から三六年まで、白

岩は理事長をつとめた。同会が最も力を入れたのは教育事業であり、特に東亜同文書院であった。また、同文会の事業の中で教育に次ぐものは調査・編纂・出版であった。出版物の中で、白岩の大きな功績であり現在もわれわれがその恩恵を受けているのが『対支回顧録』（正・続、各上・下）全四巻である。現在の研究水準を考えるとその記述内容の吟味が必要だが、人名列伝を含めて資料的価値は高いと著者は述べている。

一九白岩は中国市場の航運、通商の分野で活動が続けてきたが、日露戦争後活動分野を拡げて資本輸出、借款などの実現に努め始めた。一九〇九年東亜興業の設立、一〇年の赴清実業団の派遣は、白岩の従来の経験、知識のすべてをかけた経済活動であった。これに對抗したのが三井物産であり、一三年創設の中国興業（のちの中日実業）株式会社であった。

二〇一九一九年の五四運動直後、白岩は原首相の示唆と指示で中国に赴き日中実業人の意思疎通に努めている。「民間実業家の経済主義外交」（二七一頁）により日中関係の調整を図ったものである。その結果二〇年六月渋沢栄一を会長、白岩ら一四名を幹事として日華実業協会が発足した。会の舵取り役を担ったのが白岩であり、二〇年代の中国国民革命の進展の中で日中関係の緊迫化にどのように対応するかという問題が協会の最大の課題となった。ここでは、幣原外交の対英米協調路線と国民党蒋介石とに期待する白岩が、国内の対中強硬論の前に苦慮する実情が描かれ、また二七年九月の蒋介石来日の際の蔣と白岩らとの興味深い対談の発言内容が紹介されている。

二一は一九二八年五月の日本軍の中国国民革命軍攻撃に端を発した済南事件をめぐる、白岩がどのような態度をとったかを検討している。白岩は出兵に「賛成しているようではない」（一九四頁）また、満州問題は別として、中国本部の問題では、列国協調なかでも日英協調を主張している。その点では、白岩は上海や長江流域に視点を置いて、蒋介石の国民政府による中国統一を支持し、幣原外交の中国政策に近い立場をとっている。三井物産の山本条太郎、森格らが満蒙への積極進出を推進し、国内で主流派を形成したのに対して、白岩は上海、長江、湖南を活動の場として「揚子江組」を自称した（一九八頁）と著者が指摘しているのは興味深いものがある。

二二白岩と西園寺公望の交友は一九〇四年に始まり、昭和期に入ってから西園寺は白岩を中国通としてのみでなく、「対外硬派」との人脈はあるが、決して冒険主義的国家主義者ではない、知恵ある人物として」（二〇二頁）評価していた。一方、白岩と近衛文麿の関係は、東亜同文会を通じての白岩と近衛篤麿の親交を引き継いで親密の度を深め、白岩は文麿のいわば「別動隊」として中国問題に関して緊密な行動をとっている。

二三昭和初期に白岩と関係のあった人物として平沼騏一郎、牧野伸顕、一宮房次郎、宇垣一成らと白岩との交流を記している。

二四白岩の晩年の一九三八年、白岩が創立以来中心となって経営してきた東亜興業は経営不振のため、政府に支援を要請する請願書を提出した。それは実業家・白岩の敗北であった。このとき、白岩は三六年脳溢血で倒れて以来、自宅療養中の身であった。三九年重慶向け放送の中で白岩は、日中間の「事変処理」と国交回復を呼び

かけると同時に「日清戦後清国上下は怨を忘れて日本を師とし友とした。その寛容と道念とに報ゆることの十分なるを得ざりしことは我等の今日尚顧みて恥じ且懼るるところであ」と語りかけた(二三二頁)。四二年二月逝去。享年七二歳。

第二部は現存の白岩の日記の全部を収録したものである。明治期は明治二九(一八九六)年一月五日から明治三九(一九〇六)年二月二九日まで、昭和期は昭和八(一九三三)年四月二二日から昭和一〇(一九三五)年二月三一日までが現存しており、大正期の日記は全然残っていない。

明治期の日記は中国文で書かれており、著書による平易な日本語訳が付記されていて非常に便利である。但し昭和期の日記は全部日本語で書かれている。

日記全体を通じて、人名には適宜著者による註が欄外に付記されていて、内容の理解に大いに役立っている。

### 本書の特色

第一に、本書のすぐれた特色は白岩という実業家の日記を通じて、白岩の日中関係の中での経済活動に中心を置きながら、当時の日本と中国の双方の政治状況及び日中両国間の政治・外交的関係の歴史的背景をも視野に入れて、一八九〇年代から一九三〇年代までの日中関係の全体像を克明に描き出していることである。ここでは、中国問題に強い関心を有する白岩が日本の対中国政策の一環としての経済外交に関与しつつ苦闘する実態が鮮明に浮かび上がってくる。

第二に、白岩の自称する「揚子江組」という言葉の意味については、著者が指摘するように、白岩の実業家としての出発点が上海であり、そのこの経済活動の場は長江、湖南であったことから考えれば容易に理解できるように、白岩の対中国経済外交の重点も長江流域に置かれていたといえよう。その場合、長江流域における英米をはじめとする列強との協調が不可欠であり、そこに協調外交が必要となったのである。それはまた、著者が述べているように、幣原外交と共通する点でもあった。当時の、特に日露戦争以後の日本の対中国政策の最優先課題が、満蒙への積極的進出、獲得へと収斂しつつあった時代においては、それとは異なる白岩の経済主義外交の本質を捉えた重要な指摘であるといえるであろう。

第三に、疑問点を一つ挙げておきたい。著者の指摘するように、一九一三年二月『太陽』所収の白岩の「支那悲観論の愚を啓く」の中で、中国人の間に「黄色人種は一致協力して白色人種の侵入を防ぐべしと叫び、さらに進んで日支同盟論等を唱うるものあるに至りたるは支那の爲めにも又東洋全体の爲めにも大いに歓迎すべき現象なりと思う」(二二二頁)と述べていることから明らかなように、この一九一三年の時期の白岩はアジア主義的思考を有していたことは間違いない。しかし、著者も引用されているように、白岩の一九〇〇一月の「湖南視察の鄙見」や一九二八年八月の『我が海外貿易と日支経済関係』の中では、列国協調を主張しており、これらの時期の白岩はアジア主義的認識に乏しいといわねばならない。従って、白岩のアジア主義は必ずしも一貫した主張ではなくて、時期によっては対欧米協調の立場に立ったこともあると見るのがより正確ではな

かろうか。著者のご教示を得たいと思う。

個人の日記を紹介し、解説ないし解題を付して公刊することは、それだけでもさまざまな困難を伴う仕事である。さらに、日記の紹介とともに、その時代の社会的背景と国内的国際的環境についても論及して、両者を一体のものとして構築して提示することは、まさに至難の作業といわねばならない。同時代の諸側面に関する多面的な該博な知識の蓄積が必要不可欠となるからである。

著者のこの大作は、白岩龍平の生涯とその人間関係の諸事実を、およそ利用し得る限りの関連の資料文献を駆使して、これ以上は描けない程に精密に細大漏らさず明らかにしている。それは白岩一人の日記とその解題としての白岩の伝記にとどまらず、関連する多くの分野と事件などに関する今後の研究に豊富な素材と多大な示唆を提供しているのである。

多大の労苦と時間を要するこのような仕事に取り組まれた著者の長年に亘る努力に対して衷心より敬意を表するとともに、本書を、今後の日中関係史の研究にとって不可欠の必読資料として広く江湖に薦めたい。

(研文出版 一九九九年 六九七頁)

(電気通信大学名誉教授)